

「緑の資本論」

中沢 新一著



九月十一日、あの同時多発テロを起点に、

日常とのかかわり、社会を見る視点、情報のうけとり方に何か変化が起こった人は多いはずだ。著者は言う。「私はもう思考の主人ではいられなくなった。私が思考するのではなく、思考のほうを私を駆り立てて、ことばに向かわせる」と。その先には現在、多くの国が歩む資本主義の実像が浮かぶ。果たしてそこは、イスラム世界からどう映っているのか。

同じ旧約聖書を土台とする一神教の宗教だが、キリスト教では、三位一体である「父と子と聖霊」の『聖霊』の存在が大きいと言う。聖霊のある瞬間あらわれ一方から与えられる形に、貨幣が商品形態をとったとたん開始される剰余価値誕生の運動とが重なりやすいと指摘する。それに対し、その自己増殖や変化を一神教を危うくする魔術的本質とし非難してきたのがイスラム教だとする立場をとる。

イスラム的一神教を貫く論理「タウヒード」

狭義超えより広い世界へ

はアラビア語で「ただ一つとする」を意味する。そこでは森羅万象、宇宙を形づくるすべてが『神』の変容となる。風のそよぎ、動物の吐息、光のふるえ、声など、この世界にあるものすべてが神の直接的表現として意味をもつのだ。よって実物よりはるかに肥大したイメージを操作し流行をつくりたり、規格化した大量生産や消費へ向かう力は抑制される。

だが、両者はやがて富と貧困の圧迫から、それぞれに交易や交流、対話まで失っていく。そんな非対称な関係の危険性を早くから察知し、作品にしていたのが宮沢賢治だという着目も面白い。賢治は、決定的につながるのな世界を人間と野生動物の関係に見た。狩猟時代にはまだ行き来があった両者は、やがて、人間が圧倒的武器や家畜化という手段をもったときから支配と被支配が確定する。『狂牛病』は牛たちに、同類の牛の脳や内臓を飼料として共食いさせたことへの復讐ともとれる。

人間主義の狭義を超え、資本のメカニズムも凌駕し、より広い世界へいくことを作者は、マルクスの資本論を軸に、宗教と経済をつづじて問っている。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）

集英社・1800円